

ちょっとした差で、
あなたの仕事が大大きく変わる!?

ビジネス

「正しく自分を表現するスーツ姿は
ビジネスにおける最強の武装」

—服飾史家・中野香織さん

**スーツを装うルールには
歴史と慣例の裏づけがある**

ビジネスにおけるスーツのルールと聞いて、そんなものがあるならマニュアル化してほしいと願う方は少なくないでしょう。服なんて人に不快感を与えなければそれでよし、そもそも他に考えることが多々あるので服装のことまで頭を悩ませたくないという発想が、仕事の士気を下げかねず、交渉における影響力も薄い「作業着」の蔓延を許しています。

ではビジネススーツの普遍的なルールとはいったいどのようなものなのでしょうか？ いつ誰が決めたものなのでしょう？

「スーツ賢者」とされる何人かの方に聞いても、全く同じ答えが返ってくるわけではありません。ある権威によって成文化された国際統一ルールがあるならばスーツを着る男の心はもっと安らかでいられるのですが、常に例外の余地を残しながら刻々と変化します。逆にいえば、厳密な統一ルールがない点こそスーツの妙があるともいえるのです。

実は今年がスーツ生誕350周年という記念の年。上着と下衣に、シャツとタイと靴を組み合わせて着る衣服のシステムをスーツと呼ぶならば、このシステムは、1666年のイギリスにおいて、当時の国王チャールズ2世の宣言のもとに誕生しました。以後、19世紀なかばに現在の形の祖先、ラウンジ型テイラードスーツの原型に落ち着くまでの

200年間、スーツはありとあらゆる男の理念を表現してきました。

処世術にたけた紳士らしさ、スポーツマンの優雅な無頓着、軍人の規律正しさと平時のくつろぎ、古典古代の英雄の色気、個の抑制を通して傑出を志すダンディの意気、世間に受容されるための謹厳な品格。それらの痕跡を細部に残しながら、スーツのシステムは、形を変えつつ連続と続いてきたのです。ボタンやスリットやポケットや襟といった細部はもちろん、シャツを袖口から若干見せるとか、いちばん下のボタンを開けて着るといった着こなしの決まりはすべて、スーツの歴史に対する敬意の証でもあります。

**優れた服装術は
ビジネスに信頼を生む**

ビジネススーツのルールなるものは、スーツの歴史を尊重することから生まれた約束事に加え、影響力のある人々が集いあうなかで暗黙裡にでき上がった慣例から成っています。

だから、歴史を知り、かつ、最新の慣例に目配りしておけば、ルールなど恐れるに足りません。逆に、基本のルールさえ押えておけば、とりあえず悪くない見栄えを手に入れることができます。その先の段階として、ルールとの距離を測りながら、自分の立場や仕事、パーソナリティ、言葉、行動すべてと共鳴させられるスーツの着こなしを体得できれば、それは無言の影響力を発揮する最強の武装となります。統一ルールがな

いところにスーツの妙があるというのは、まさにこの点においてです。

ルールを知りながらあえて逸脱するというポーズもありますが、それが許されるかどうかは、着る人の地位と影響力と、それも含めた存在の説得力にかかっています。故ステイブ・ジョブズがビジネスの現場でもスーツを着ない「ノームコア」スタイルを貫くことが許されたのも、存在の説得力の裏付けがあったから。

ちなみにスーツは着なかつたジョブズでも、ビジネス社会における服装の重要なルールには従っていました。それは、常に相手に対して一貫した印象を与えるということ。同じ型番のセーターを数百着揃えるという投資があつてこそ、セーター＋ジーンズの装いであつても、彼のぶれない理念を表現するビジネススタイルとして成功していました。つまり、ビジネスにおいては、自分の着たい服ではなく、相手に与える一貫した印象を意識して装うという発想をもつことが最低限の必要条件です。

歴史を知り、最新の慣例を知り、そのうえで、自分の立ち位置、仕事、行動、言葉を、服装とどのようにリンクさせ、総合的に演出するのか。これに成功できる男がビジネスにおいても信頼を獲得しやすいこと、言うまでもありません。

服飾史家

中野香織さん

明治大学国際日本学部特任教授、古今の服飾史の研究・執筆・講演を行う。最新刊は「紳士の名品50」（小学館）。

